
妖怪町騒動

鈴鳴月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪町騒動

【Nコード】

N2076W

【作者名】

鈴鳴月

【あらすじ】

妖怪の住む街、妖怪町の話。

狛犬である苦労性の灸と二重人格の気のある聖は、妖怪町の人々（変人多し）と協力して事件を次々と解決する（かもしれない）！

恋愛色は薄めです。R15。残酷な表現もありますので許容できる方のみ御覧ください。

狐が攫われた。

九月半ばの日暮れ一番、妖怪たちに伝わったのは恐ろしい報せだった。

狐——白狐と黒狐。妖怪たちの住むこの町を統べる、実質的なリーダーである。

そのうちの一人、黒狐が攫われたと言うのだ。

「嫌な風が吹いている」

予言者の夜迷鳥よまいどりが静かな声で正月の祝言の中述べたその言葉は、この一年の間に恐ろしいことが起こることを予言していた。

まさか、その言葉が本当になるとは……。

大騒ぎになる町の中で、神主の服を着た人の姿に犬の茶色い耳と尻尾を生やした狛犬やいとの灸やいとは考えていた。

「キュウ、本当だと思う？」

同じ家に住んでいる相方の狛犬ひじり、聖ひじりが買ってきた蛙の串焼きをかじりながら言う。こちら灸と同じ服を着ている。耳と尻尾の色は黒だが。

「……白狐様が言うならば本当のことなのだろう。セイ、武器の手入れをしておけよ」

灸と聖は、それぞれキュウとセイと呼び合っている。自分の本当の名を敵にすぐ知られないためだ。

そして灸と聖はその戦闘能力の高さを買われて、あらゆる敵と戦う時のまとめ役を任されていた。

「うん。キュウの武器も使えるようにしておかないとね」

人懐こい笑みを浮かべて聖は灸に蛙の残りを渡すと、奥の部屋へ引っ込んでしまった。聖はいつも武器の手入れを奥の小部屋でする。そのほうが落ち着くらしい。

「白狐様と黒狐様には多大な借りがある。今こそそれを返す時」
聖の残していった蛙をかじりながら、灸は一人呟いた。そう、余所者だった灸と聖をこの地位までつけてくれたのは何を隠そう白狐様と黒狐様なのだ。この一大事に役に立たないでどうする。
灸は武器の手入れの音を聞きながら、一人静かに考え事をしていった。

次の日。

灸は日暮れとともに起き出した。今日は白狐様から全妖怪町住人に向けて大切な知らせがあるのだ。町の中央付近にある大広間に早めに集まらないといけない。

「セイ、起きろ」

灸は奥の小部屋で武器の手入れをした格好のまま眠っている聖を起こしに行った。何にせ、聖は寝起きが悪いのだ。ここ辺りにも灸が早起きをしなくてはならない要因のひとつがある。

「……」

案の定、聖はその黒い尻尾をぴこぴここと返事代わりに振るだけで起きる素振りを見せなかった。

仕方がないと灸は嘆息し、市場へ食べ物を買いに家を出た。灸も聖も、料理が出来ない。

「今日も早いね、灸」

「^{かなめ}要、お前ほどではない」

蛙を串焼いている店の前で灸は止まった。店主の言葉に返事をし、よく焼けていそうな蛙を見定める。

灸は店の中、本来なら店主がいる所を見やったが、そこはもぬけの空。要はいつも姿を見せないのだ。

「牛蛙の串焼きを二本と、雨蛙の串焼きを三本頼む」

「へいよ。タレか塩、どっちにするかね？」

「全部タレで」

「取りな」

どさりと自分の右隣で音がしたと思ったら、灸の横には注文通りの品が入った紙袋が置かれている。

「代は？」

灸ががま口を出しながら訊ねると、店主は即答した。

「銅を六」

灸はがま口から銅銭を六枚出すと、店の中に放った。ちやりと金属同士が当たる音がしたかと思うと、投げ込まれた銅銭は全て空中で消えてしまった。

「まいどあり」

店主がそう言ったところから見ると、代はきちんと払えたらしい。灸は傍らの紙袋を抱えると、家に戻った。

「キュウ、何買ってきたの？」

家へ帰ると聖が既に大部屋で寝転んでいた。

「蛙の串焼き」

「やったあっ！」

灸の言葉にそう返すと、聖は飛び起きて灸の抱えていた紙袋を奪い取る。聖は蛙の串焼きが好物なのだ。

「牛蛙一本と雨蛙二本は僕のね」

そう宣言するや否や、ぱくぱくと蛙を平らげてしまう。

「セイ、もうすぐ集会が始まる。準備をしろ」

それを見ながら灸はそう言い、自身も用意をし始めた。

妖怪町の住人全てが集まる大広間。

月も空高く昇り、草木も眠る丑三つ時。

そこに、灸と聖はいた。

「キュウ、皆いるよ。夜迷鳥も、蓮跳びの蛙も。見慣れない人も、たくさん」

「集会だからな。普段は顔を出さない者も皆集まる」

灸と聖はざわつく妖怪達の中、その言葉を交わした。

その時、不意に背後から落ち着いた声が響く。

「そこにいらっしやるのは、ひよっとして灸様と聖様ではありませんか」

その声に灸と聖は振り向き、顔を綻ばせた。

「金魚か」

「結^{ゆわえ}じゃん、久し振り」

結と呼ばれたその人影は、あでやかな着物とつややかな髪を持つ女だった。その身は赤い金魚の化身である。

「はい、今夜は集会と言うことで、私も久々に端池から上がって参りました」

「端池かあ、懐かしいな」

照れたように微笑する結を見て、聖が目細める。

実はこの結、地上で動けなくなっていたところを聖に助けられた事がある。

「ええ。とても」

「そう言えば金魚、黒い奴はどうした」

そのやり取りを聞いて思い出したように灸が結に訊ねる。

「ああ、掬^{むすび}なら今日は体調が優れないと言うので、端池でおとなしくしております」

掬、とは結のパートナーで、黒い金魚である。

「今度治りましたら私も掬も隊列に参加します」

「ああ。頼む」

そして結と掬は、やはりその能力を買われて灸や聖と共に敵と戦っているのである。

「そら、集会が始まるぞ」

誰かの掛け声で、大広間は一気に静まった。

01（後書き）

文章力皆無ですがしばらくの間お付き合い下さい。
更新速度は激遅です

しんと静まった大広間。皆が皆、広間の中央辺りにある一段高くなつたところに注目する。

ふとその空中の空間が歪んだかと思えば、そこから純白の衣装に身を包み、狐の耳と九つの尻尾を生やした美しい女が降りてきた。この女こそが白狐。神出鬼没のリーダーである。

白狐の登場に静かにざわめく聴衆たち。それは灸と聖、結も例外ではなく。

「白狐様……」

と、灸などもう恍惚状態に陥っている程だ。

その聴衆たちを優しい目で見つめ、白狐は手に持っている扇子をすつと広げた。途端に空気が変わり、ざわめいていた妖怪たちが静かになる。

「ごきげんよう。今宵このように集って頂けたこと、私は妖怪町の長として光栄に思います」

透き通り天まで昇っていくような声で、白狐は言う。それだけで笑顔になる妖怪たち。白狐の声は、大広間を支配していく。

「皆ももう知っているでしょう。我が半身、そして同じくこの町の長である黒狐が何者かの手によって攫われました」

「ごおっと、まるで竜巻のように敵への憎悪と黒狐への心配が渦巻く。」

「これは由々しき事態です。私と戦闘部隊は一刻も早く黒狐を救い出すため、努力しております。ですから……どうか、皆は仲間割れなどせず、敵襲に備えて用意を、準備をお願いいたします」

はい、と妖怪たち皆が一糸乱れぬ返事をした。

集会の後しばらくして、戦闘部隊の隊員は白狐に呼び出された。

灸と聖はそれに応え、武器を持って町のはずれにある白狐の屋敷に集まった。

「皆、おりますか？」

闇よりも暗い部屋の中、白狐が確認する。

「……はっ」

その問いに各々が返答をし、会議は始まった。

灸と聖は白狐の側にひざまずき、一言一句聞き逃すまいと耳を立てていた。

人間では視界の利かない闇も、妖怪ならばまるで昼間のように見渡せる。

さほど広くもない部屋の中にいたのは、妖怪町の中でも一二を競う強者ばかり。灸と聖はもちろんのこと、結や調子の悪いと言う掬河童や猫又など人間にも知られている妖怪など名だたる者たちである。

それらが皆一同に介して、白狐の言葉に耳を傾けている。

「黒狐を攫ったのは、梢一団こすえいちだんじゃ」

誰かがそう口に出した。途端に皆が凍りつく。

梢一団とは、人間達の集まり。そこへ入った人間はなぜか妖怪の姿が見えるようになるという。そしてその一団の一番厄介なところは、

「木代様の血にや、手出しできん」

大蛇の告げたとおり、梢一団全員がある血筋の人間だと言うことだ。

その血筋の大本である先祖木代全は、かつてこの辺りに生息し悪さははたらいていた妖怪たちを、安全な妖怪町を作ってそこへ住まわせてくれた人物である。

木代全は妖怪を見る以外に何も能力を持っていなかったのだが、妖怪にそこまで尽くしてくれた全に妖怪町の妖怪たちは忠誠を誓い、今後木代の血筋には手出しをしないと云う約束をしていた。

が、木代の血筋が代を重ねるにつれてなぜか妖怪町の妖怪を捕え

たり倒したりするようになってしまい、妖怪たちはほとほと手を焼いているのである。

今まではまだ妖怪町に深刻な被害が出ていなかったただ、今回は黒狐誘拐だ。ここまでされては黙ってはられない、のだが。

「木代様の血には勿論手を出してはなりません」

約束を破る、と言う行為は妖怪にとって死を表すのだ。

「しかし、黒狐は取り戻さなければいけません」

苦々しい顔で白狐は口を開いた。

「皆、人を傷つけないように黒狐を救い出すことはできますか」

それは白狐にとって、苦渋の決断だった。

いずれにせよ、犠牲を伴うことは間違いない。

下手をしたら全滅してしまうかもしれない。

白狐はそう考えながら、それでもそう言った。

稍一団がそれだけ強いということでもあるが、所詮は人間。集団になった妖怪たちには敵うはずがないのだ。しかし、妖怪たちは手を出さない。

なぜ自分の命が脅かされているというのに、そこまでして約束を守るのか。

理由はない。妖怪たちにとって、約束とはそこまで重いものなのだ。

それが自分たちに良くしてくれた人間との約束ならば、さらに。

白狐の脳裏には遙か昔のことが鮮明に蘇っていた。自分たちを安全な所まで連れて行ってくれた木代全の、その顔の細部まで。

「お願い、できますか」

白狐はもう一度言った。それは自らの覚悟を示した一言。そして自分の為、この町の為に集う妖怪たちの覚悟を試した一言。

「……はっ」

妖怪たちは闇夜に浮かぶような白狐の必死な顔を見て、感化され

たかのように返事を揃わせた。

空が白んでくる。

夜が明けた。ここからは、人間の時間だ。

「よう黒狐、気分はどうだい？」

どこかの薄暗い檻の中、うずくまっていた黒い狐が人間の声にゆっくりと目を開いた。

その目は真紅。喻えられるのは、深い血の色。

しかし開いた目は力を失ったようにすぐ閉じられる。

「良いわけねえか。クスリが効いてるんだからよう」

げらげら、とその男は下品に笑うと言った。

「あ、そおだ。その檻、あんま触んないほうがいいぜ？ビリッときちまうからな……」って、お前はもう経験済みかあ」

げらげらげら。

しかし黒い狐はびくりとも動かない。

「ほうらゆっくりお休み、金蔓さん」

節をつけたように、男はそう言った。

「何なら白狐も捕まえるかあ？」

男がそう言った途端、黒い狐の目がカツと開かれる。

間にある檻も気にせず男に飛び掛ろうとする、が、電流にはじかれ無様に地面に這いつくばった。

「おっと危ねえ危ねえ。あんま体当たりして死んでくれるなよ、報酬が減るからさ」

わざとらしく黒い狐の体当たりを避ける振りをし、男は檻のある部屋から出ていった。

げらげら、と笑いながら。

02（後書き）

いきなりクライマックスのような……

一応、灸が主人公のつもりです

次の夜、隠密行動に長けた妖怪数名が妖怪町の外に拠点構えている梢一団の偵察から帰って来た。

白狐は黒狐の様子を探るために、前夜の集会から寝もせず占術せんじゆつと祈禱きとうを繰り返している。今までの情報で分かったことは、黒狐が何かの薬品で力を奪われどこかの檻の中へ閉じ込められているということだ。恐らくその檻は梢一団の拠点にあるだろうと予測される。

偵察によると一団の総人数は二十名程。そのうち何らかの異能者（木代全からの木代の血を継ぐ者は異能の類が発生しやすいが原因は不明）は確認できるだけで五名いると言う。

その拠点の場所は、妖怪町の南側にあるかなり大きな森の中。一団はその名の通り木などの植物を使った妖怪との戦闘を得意とする。最終の止めは銃だが。

そして一団の所有する武器は、毒矢と何かの薬品と猟銃二丁。これは概ね今までの戦闘の時と変わりはない。今までは犠牲を出しながらもこちらが勝利してきた。かといって油断は出来ない。問題は、少し薬品の量が今までよりも多いことだ。

前線に立つ灸ら戦闘部隊はその情報を受けて、戦法の練り直しを行うため再度白狐の屋敷に集まった。度重なる占術と祈禱で疲労している白狐は今回の会議には参加しない。

闇の中に、見慣れた顔が集まる。

誰からともなく、妖怪町の地図を前にしての意見が飛び交った。

「町の南方向に壁を造ってはどうか」

河童が水かきの手をぱたと振りながらそう言うのと、

「いんにゃ、そんにゃことしてる間に梢一団に攻め込まれるにゃ」

猫又がその二又の尻尾を不機嫌そうに左右に振り振り口を動かす。

「だが守りを疎かにすると弱いのも確かじゃ」

攻撃より防御のほうが大事じゃぞ、と諭^{さと}すように万年龜爺は口ひげを揺らした。

「かといって攻撃をしなければ一方的に攻め込まれるだけだがそこはどうだ、爺」

まるで皮肉るように大蛇が龜爺に疑問を提示する。

「決まつとろう、この甲羅^{びうろ}で防御は完璧じゃから後は攻撃するだけじゃ」

「おみやあみたいにや甲羅持つているのはおみやあだけにや龜爺つ！！」

ふみぎゃああつ、と我慢が切れたのか不穩に叫んで短気な猫又がその長い爪を出した。それはまるで鋼鉄のように輝いている。

対して万年龜爺は不敵に笑うと言った。

「やるか、小娘。その自慢の爪がこの甲羅に通用するかのうち」

「いい度胸にや龜爺つ！その甲羅この猫又の帳^{とほじ}様が叩き割つてやるにやあつ！」

闇夜に輝く猫目と爪と龜爺の甲羅が乱闘を始めた。周りの妖怪たちは全く素知らぬ顔である。こんな事は会議では日常茶飯事。相手にするだけ自分に被害が及ぶので皆乱闘は無視するのが定石である。「おうら、もつとやれやれい」

見物人風情でけたけたと笑いながら水を煽っている（大事な会議なので酒は出ない）のは、黒い金魚の化身である掬^くだ。

「掬、そんなもの見ていないであなたも意見を出してください」

その掬をたしなめるのは極彩色の浴衣を纏^{まと}う相方、結。こちらは赤い金魚の化身である。いつ見ても似合わない二人だなあ、と思いつつながら二人を見ているのは聖。

結局、まともな顔で地図を見つめているのは灸と結だけであつた。

03（後書き）

ちつとも進まない会議です。

実は会議はたくさんキャラクターが出せるので好きだったりします。

結局全く進まない会議の末、結果はいつもと同じになった。

防御力に秀でている者が町の南側に壁を築き、攻撃力に秀でているものは梢一団と戦闘に入るのだ。

会議が終わった後にはお互いボロボロの帳と亀爺、疲れた顔の灸と結、楽しそうな聖と掬にその他大多数が残された。皆その会議にいかに関与したかが一瞥しただけで理解できる顔である。

「……決戦の日取りは？」

へとへとに疲れながら灸が夜迷鳥に訊ねると、

「明後日です」

と、ツンとした表情と共に予言が返ってきた。夜迷鳥はいつもこのような態度なのだが、今の灸にはそれさえも苦痛である。

「だそうだ。セイ、武器の手入れをしておけ」

考えすぎで痛む頭を押さえながら、灸は聖に言った。ついでに護身用に持っていた刀も聖へ向かって放る。

「はあい」

聖は心底嬉しそうにその刀を受け取ると、家へ向かって駆け出した。

灸はそれを見送りながら掬に話しかける。

「ところで黒金魚、体調は良いのか？」

「んあ？……ああ、昨日飲みすぎてよう」

どうやら掬の体調不良は二日酔いだったようだ。道理で今日は水ばかり飲んでいたはずである。

「そうか、なら良い」

「それよりよお、何か聖が考え込んでいたみたいだが……大丈夫か、あいつ？」

「セイが？」

灸にとってそれは初耳であつた。家にいるときも、灸には聖は普通のように見えたのだ。

「おう。あいつも何も考えてないように見えて結構色々考えてるからなあ……。気にかけてやれよ、相方さん」

さらに考え込む灸にそう言つて、掬はひらひらと手を振りながら端池の方へ歩いていった。

「……セイが考え事、か」

あいつもああ見えて成長してるのかも知れない。

灸はかすかに微笑むと、今度こそ家へと歩き出した。

「おかえりー」

土間で草履を脱いでいる音を聞きつけて聖が家の奥から灸に声をかける。

「ああ、ただいま」

普段通りの声だな、と思いながら灸はそれに返した。何も変わったことはなさそうだ。

いつものように奥の小部屋から武器の手入れをする音が聞こえてくる。

「セイ、あまり武器の手入ればかりしていいできちんと寝ろよ？」
灸は聖にそう言った。言っておかないと聖はいつまでも手入れをし続けるのだ。ひどいときは手入れをした格好のまま眠っていたりする。

「うん、わかつてるー」

いつも通りの無邪気な声。

聖のその声を聞くと、灸はもうすぐ明ける空を少し眺めてから寝支度を始めた。

大体灸と聖とでは、いつも灸が早く眠る。その分灸は聖より早く起きるのだが……。

自分が眠った後、聖は一体何をしているのだろつ。

灸はそう思いながら、眠りに付いた。

「キュウは本当に寝付きいいなあ」

灸が床についてからしばらくした後、自分と灸の刀を大事そうに抱えて聖は奥の小部屋から出てきた。

辺りはもう明け方と呼ぶのにも遅いような光に包まれている。

「よいしょつと」

静かにそう呟くと、聖は持っていたその刀のうち灸の方を寝ている灸の布団の横に置いた。

「灸の言った通り、僕も早めに寝ることにするね」

そう言って聖は灸の頭を撫で、着替えて灸の敷いてくれていた自分の布団にもぐりこむ。

「明後日は頑張ろうね、キュウ」

人間はいつも無力な分、ずるがしこ狡賢い。

黒狐は己の首に掛けられた首輪のような物を何とか外せないかと苦労しながら、思った。

『クソツ……。取れん!』

思わず声まで出してしまう。

この首輪は梢一団の中の異能力を持つ者が作った物で、妖怪の首につけるとその妖怪は妖力を使えなくなってしまう、という恐ろしい代物である。

その効力は妖力だけなら妖怪町随一と自負する黒狐も例外ではなく。

高圧電流の流れる檻と併用されると、妖力で治癒するはずの傷も治らないので弱ってしまうのである。

『……………』

黒狐は首輪を取ることを諦め、少しでも体力を温存しようと丸まった。

ここまで派手に一団が動いているのだから、きっと助けが来るは

ずだと信じて。

04（後書き）

いよいよ決戦です！

05（前書き）

残虐な表現を含みます

月が良く見える、静かな夜だった。

灸と聖率いる戦闘部隊は、村の南に築かれた壁の前で最後の確認をしている。

「前衛は僕とキユウと猫又ね」

頑張るぞー、とでも言いたげに刀を高く上げる聖。危ない、とその頭を叩くのは灸である。

「ちよつとそこの黒狛犬、私には帳と言う高貴にやにやまえがあるのにやあ！ちゃんと帳と読めにや」

猫又と一くりに片付けられたのがお気に召さないのか、帳は終始にやあにやあとうるさい。

「中衛は掬と蓮跳びの蛙」

「おうよ」

「了承した」

そんな猫など気にも掛けず灸が中衛の名を読み上げ、確認は進んでいく。

「後衛は私と大蛇ですね」

「遠距離は任せておけ」

最後に結が静かに括弧、確認は終了した。そして各自配置に付く。

「キユウは僕が守るからね」

「何を言っている。お前の方が守られる対象だろう？」

前衛の位置に立った灸と聖はそんな軽口を交わしながらゆっくりと自分の刀を抜いた。

先ほどの喧騒はどこへやら。

森はすっかり、静まり返っていた。

ガサガサと音を立てて何かが闇の中を進んで来る。

『来ました、梢一団です。数はまず五人、次いで四人、最後に何か

の籠と六人。武器は猟銃一丁と刀二本、それと何かの薬品が四瓶です」

風に乗せられた夜迷鳥の音が戦闘部隊の耳に届く。人間には聞けない程小さい音なので、梢一団に聞かれる心配は無い。灸と聖はそれを聞き取って既に抜いていた刀を構えた。

ガササッ

「行けっ！」

聖にそう指示しながら灸は動いた。構えた刀を横向きに構え直し、大上段に構えて敵の目前に躍り出た聖の後ろからその敵の武器を叩き割る。キンという高い音が辺りに響き渡った。

奇しくも、それが開戦の合図になった。敵も、味方も。

まるで自分たちの行動が読まれていたかのような攻撃に敵が怯んだ隙に、聖が構えていた刀をそのまま振り下ろす。頭からぱっくりと割れた無残な武器がまた一つ。

「……うっ、うああああ……」

戦場に立ち慣れていないのか、猟銃を構え引き金に指を掛けたままがたがたと震えている男を灸はその人外の膂力^{じりよく}に任せて問答無用にその銃を断つ。

暴発したのか二、三発の銃弾が飛び散り辺りの木々を散らしたが、そんなもの妖怪は気になどしない。

危害を加えられないのなら、と妖怪たちは自身が本来持っている多大なる存在感より発せられる限界までの緊張感で敵を気絶させていく。

「進め！」

気絶した敵とその武器を踏み越えながら灸が叫ぶと、了解と言う返事をする時間すら惜しいとも言わんばかりに嬉々とした表情で戦闘部隊が駆け出した。同時に町の壁の前に防衛隊がずらりと並ぶのを見て、灸も安堵し走り出す。まだ前線は破られていないらしい。

「怯むな、撃てえ——ッ」

泡を食ったように梢一団の戦場指令官らしき薄い外套を纏った男が猟銃を持つ奴に命令をしているが、既に銃は部品の一つ一つまでぐつしよりと濡れており役には立たない。濡らしたのは結。お得意の水を操る戦法でさつさと火薬系を潰してしまった。

「……今回の先鋒は不慣れな奴ばかりなのか？」

近づいてくる敵を軽く刀で捌きながら灸は小さく呟いた。

「どおーも、そうらしいなあっ！どうしたお前ら殺り甲斐が無いぜえっ?!」

けたけたと薄気味悪く笑いながら薙刀を持った掬が灸の意見を採る。

それだけ、今回の襲撃はレベルが低かった。普段なら町の城壁まで追い込まれているはずで、いつも犠牲を出しながらもぎりぎりで侵入を跳ね除けて来られたかな、と言う程の強さなのだ。鍛錬をして強くなったとは言え、灸は自分でもここまで上手くいくとは思っていなかった。

「いや……もしかすると、上手くいきすぎた……?」

皆景気良く敵の武器をまるで西瓜のようにぱかぱか割っている。

血腥くない不思議な戦闘の中、灸は考えた。そう言えば今回の襲撃、見慣れた顔がほとんどいなかった。襲撃に関わる、特に先鋒のメンバーは顔ぶれが毎回ほぼ変わることは無いのだ。今蓮跳びの蛙によって麻痺させられ、そのまま気絶させられた戦場司令官でさえも初めて見る顔だった。

灸がそこまで考えた時、森の向こうの方で何人かがごそごと動いた。灸のうなじの毛が逆立つ。

これは、悪い予感だ。

「畏だ、退けっ!!」

灸は自分の読みの甘さに後悔しながら皆にそう指示した。

「退け——っ！」

そして、もう一度。

皆を危険から遠ざけるために灸はわざと敵の前に出、戦いに慣れていない敵の目を引き付ける。慣れている者ならともかく、素人にはこれで十分なはずだ。

灸はあからさまに浮き足立った敵の前で刀を横に大きく薙ぎながらもう一度、叫んだ。

「早く！逃げろ——おっ！！！」

それに呼応するように背後の仲間たちの気配が遠ざかっていくのを感じる。

良かった、皆を殺さずに済んだ。心の中で灸は強く思った。

同時に、森の奥で何かが光った。

「うっ……」

光を浴びると共に猛烈な息苦しさが灸を襲う。

あまりにもな苦しさに灸は思わず刀を取り落とし、喉を押さえた。

「く……かはっ……！」

息が出来ない。

五感が遠くなっていく。

自己が認識できなくなりかけた、時。

「ほら、言っただろう？」

誰かの声がした。途端に息苦しさがから開放される。

「……誰……だ？」

05（後書き）

9 / 11 やらかしましたすみません！物語の進行自体は変わってませんが、とにかく白狐の言ったこと丸々忘れて敵に危害を加えてしまいました。以後気をつけます。自分のキャラの発言には十分注意しますもう忘れたりしません！

変えた部分

「敵の脇腹を」↓「敵の武器を」

「血腥い臭い」↓「キンという高い音」

「無残な死体」↓「無残な武器」

「問答無用にその首を断つ」↓「問答無用にその銃を断つ」

「敵の屍」↓「気絶した敵とその武器」

「敵の頭」↓「敵の武器」

「腹から一刀両断された」↓「そのまま気絶させられた」

あと色々足しました。本当にすみません…

自分の身体が地面から浮いている感覚がする。いや、感覚ではない。実際にその人影が灸を抱きかかえているのだ。

「その玉は……妖怪のみに効果を発揮する……蚊取り線香みたいなものか」

まだ視界がぼんやりとする中、その人影は小さく独り言のように呟いた。途端になぜか目を灼くような光が消えたが、まだ灸の視覚は回復していないので人影はぼやけた人影としか認識できない。

「き……消えた?! 『光・妖怪弾』が! ……何をした!!」
向こうから敵と思しき慌てた声おぼがする。

「そんな変な名前なんだアレ。ネーミングセンス最悪だね。……それはさておき、僕はただそれに闇をぶつけて相殺しただけ。僕にはそれぐらいしか出来ないから」

自嘲するように軽く笑って、その人影が言った。

「でも……僕はキュウを守るって言ったからね」

人影はそう続ける。

灸は人影のその台詞で、そいつが誰なのか認識できた。が、理解は出来ない。

「セイか? ……セイなのか?」

よく聞くとその声も聖のものである。が、口調とその身に纏う雰囲気が全く違う。セイは、聖は……もっと何にも考えてなさそうな、皆から愛される間抜けた性格だったではないか。

「そうさ、僕はセイ。聖だよ」

怪訝そうに訊ねる灸に聖はそう返すと、言った。

「キュウは女の子なんだから……たまには僕に任せてよ。皆も大丈夫だよ、町の中にいるから」

そして聖は灸を優しく自分の後ろに降ろすと、灸の腰の刀をすら

りと抜いた。

「ちよつと借りるね」

「……あ、ああ」

そうして聖は刀を両の手に持ち、構えた。

「お前らには負けない」

突然の大声。

その声が固まっていた周りの敵たちを動かした。

一気に囲まれる聖。その敵たちの目はどこか血走っていた。

「やれやれ、僕も嫌われたものだね」

その言葉と同時にぶんぶんと刀を振り回し、敵との間隔を空ける聖。

「あと、灸に危害を加えようとした奴は約束を破ってこの命を糧^{かて}にしてまで殺すからね。それ以外は気絶させるだけだけど」

そう言つてにやりと口の端を歪め意地悪そうに笑う聖には、もう以前の聖の面影は無かった。

その言葉に敵がひるんだ隙に聖は自身の持つ「闇」の力を解放した。

月に照らされた聖の背後の影が不自然なほど濃く、昏^{くら}くなる。

その影から真夏の陽炎のように何かが立ち昇った。ゆらり、とまわりの空間が揺らぐ。その揺らぎに合わせるように、細い、黒い糸のようなものが無数に敵の周りをうねり始める。

「この力、僕とキュウの両方の刀が無いと出来ないから一度やつてみたかったんだよねー」

聖はまるで玩具を与えられて喜ぶ幼児のような事を呟く。そして、その両の手に持った刀を一振りすると叫んだ。

『闇の巻・空間移動↓悪夢 持続時間半刻』

その不思議な響きを持つ言葉と同時に闇は敵全員の首に巻きつき、全ての敵がその場から姿を消した。

「まあ半刻一（30分）程悪夢を見せるぐらいなら約束には違反しないと思うし、僕が直接危害を加えたわけでもないしね。悪夢を見

るのは梢一団の勝手だし？僕には関係ないよなー。むしろ僕たち被害者だよなー？と言うわけで一生トラウマになるような夢見て来い人間。けたけたけたけた」

その声は異空間にいるであろう彼らに届いているのかいないのか判らないがとりあえず聖はお茶目を装いそう言った。その様子を見ていた灸は、いよいよあの可愛かった頃の聖が懐かしくなってきた。何にせ裏聖、密度が濃すぎる。何のかと問えば性格の。

まあそれはともかく。

「……ありがとう、セイ。助かった」

とりあえず親しき仲にも礼儀あり。というわけで灸は聖にそう感謝した。

06（後書き）

……聖がやばいことなってますがお気になさらずに。むしろスルーしてあげてください。

「うん、いいよ?」

聖は例の超絶悪笑顔で返答した。絶対こいつはあのセイと認めない!と、まあ常人(妖怪?)なら誰しもが思うようなことを心内で大きく叫ぶのは灸。少しはときめいてしまったということは秘密だ。なんてったっていつもの聖の十倍程かっこいい。が、それをこの悪聖に知られてしまったら最後何をされるかわからない。もうこいつは聖ではなくて穢けがれと呼んだ方がいいのではないかと灸は一人密かに思い始めていた。

「でもさあ、一人で突っ走るのは悪いと思うんだよね俺は。うん」

悪聖——もとい穢——の一人称が僕から俺に変化した。もう自分の本性を隠そうともしない穢に灸は呆れた。

「ところで穢……何でも無い何でも無いセイ、お前はそれが本性なのか?」

「うーん、まあ大雑把に言えばそうだよ?正確に言えば違うけどそれがどうかしたの?ていうかさっきの穢って何?」

灸に返答しながらも穢は灸の頭を撫でたり胸を揉んだりする行為をやめない。

「うーん、キュウはもうちょっと女の子らしくした方がいいと思うんだけどなあ。そもそも胸を揉まれて平然としているのは女子としてどうかと思う。まずその言葉遣いをどうにかしようよ」

更に自分で灸に質問をしておいて喋ることをやめない。

「放っておけ。……あと胸を揉む行為はセイだから許していることだ。お前は触るな。身体に障る」

「えー俺も一応聖なのにー」

そしてこの期に及んで自分のことをセイだとのたまう。

「姿形こそ同じであれお前がセイではないのは私には既に解ってい

る。生まれてからずっと傍にいたのだ間違えようが無かるう。大体一応が付く時点でお前はセイではない！良いからその手を放せ！」
「はあい」

穢は聖を意識したのか可愛く言って灸から名残惜しそうに離れた。正直、気持ち悪い。

「それから黒狐様を助けに行くぞ！あと道すがらお前の正体を教える！」

灸は無駄なかつこよさの穢の顔から目を逸らして穢の持っている自分の刀を奪い取るようにかつさらうと自分の腰にある鞘に挿した。
「そんな怒らなくてもいいのに」

「何か言ったか？」

「いいえ、何にも」

そのようなやり取りを繰り返しながら、灸と穢は黒狐がいると思しき方向へと足を進めた。

穢によると、穢という者は「聖の‘灸を守りたい’という心と、自分の力量では灸を守ることは出来ない’^{かつとう}という思いの葛藤によって生まれた存在」なのだそう。

だから穢と聖は記憶も感情も共有しているし、灸を守りたいという強い想いは同じだそう。つまり、一般に見る物程は自己の人格が分かれていない曖昧な二重人格^{あいまい}だと考えてもらったらいいらしい。穢の方の人格に名前は付いていないということなので、灸は改めて穢を「穢」と命名した。あまりにも合いすぎている、と当人の穢には大うけだった。

「黒狐様、助けに来ました」

そんなことをしている間にももう灸と穢は黒狐の檻の前へと到着していた。

灸は目の前にある檻に声をかけた。そして檻を無理やり破壊する。

「キユウは本当に人使い荒いんだからー」

ぶつぶつと呟きながら闇を自由自在に操って、そこかしこの敵たちを一人残さず気絶後悪夢へ誘っている穢は灸の後ろから付いてきた。灸はもう穢さえいれば後の戦闘部隊はいらないのではないかと思う。

『済まない。が……灸よ、この首輪を外してくれまいか？』

黒い狐の姿でのそりと檻から出てきた黒狐は、その首を伸^のして付けられている首輪を指した。

「はい」

灸は後ろの穢には構わず言われた事柄を実行した。途端に黒狐の姿が人型に変化する。

そこには、漆黒の狐耳に白狐と同じく九つの尻尾を生やし、優雅に微笑む若い男の姿があった。

「黒狐様っ！」

灸は黒狐の腕の中へと飛び込んでいく。黒狐はそれを優しく受け止めた。

「……これって俺、割に合わないんじゃないかね？」

向こうの方で静かに呟く穢の言葉は、聞かなかったことにしよう。

明け方近く、灸と元に戻った聖に黒狐は無事町の壁の前まで帰って来た。

「あの後、大丈夫でしたか……？灸様も、黒狐様も」

壁の上から心配でたまらないという顔で結が覗いている。

「大丈夫だった。心配するな」「ああ、有難う」

それに対し、輝かんばかりの笑顔で灸と黒狐は答えた。

「待つて待つて！僕はあつ？」

後ろから聖の声がするが、皆無視。

「良かった……きゃっ」

「痛えっ」

どさ。とか、ぼさ。とか言う擬音と共に結の姿が壁の上から消えた。と同時に壁の向こうから掬の汚い悲鳴が。

結に怪我が無くて良かった、と思いながら灸は町の中に入った。

「皆、この身を梢一団の手中から救い出してくれたこと、感謝する」
いつかの大広間で黒狐が皆を前にし、深々と頭を下げた。めでた
いめでたいと酒の入った妖怪たちは恐れ多くも黒狐と白狐を囲み、
なぜか胴上げを始める。わっしょいわっしょいと言う声がまだ酒を
飲んでいない灸と聖の所まで聞こえてくる。その灸と聖は、二人き
りで自分たちの家にいた。そして、縁側で騒がしい朝を見つめてい
た。

「なあセイ」

「何、キュウ」

「ありがとう」

何気なく言い放った灸の言葉に聖の顔が真っ赤になる。

「ななな何をつ……」

「穢から聞いた。ずっとずっと、私を守りたいと思っていたそうだな」

「そそそれはそうだけど何でそれで……っ」

ぐるぐると目まぐるしく目まで回しあたふたとろたえる聖にあえて落ち着き、台詞を一つ一つ並べる灸。

「私は自分が強いと思っていた。だからお前をいつまでも守るつもりでいたし、自分は常に敵にやられる危険のある先駆けでいいとも思っていた」

そこまで言った所で灸は無理やり聖を立たせ、自分も立つ。

「だがたとえ妖怪だとしても……妖怪だからこそ男女の差、体格の差というものは顕著に表れる」

ほら、このように身長だけでも。と、灸は聖を見上げた。

「それを気にも留めず慢心していた私は救いようの無い馬鹿だ。だからそれに気付かせてくれて、ありがとう」

「う……うん……」

慌てる聖に軽く笑い、灸は聖と共にまた縁側に座る。

「んんっ……。今日は妖力も多く消費したし、疲れた」

くーっ、と伸びた灸は徐に立ち上がった。

「キュウ」

そして唐突にした背後からの聖の声に振り返る。

灸は、強引に自分の口の中に舌がねじ込まれるのを感じた。

「……何をする」

灸はそう言った瞬間、妖力が流れ込んでくるのをまた感じる。その感覚はくすぐったいようであり気持ち良いようでもあり、灸は何と無くそのままだった。

「妖力の補給」

灸から口を離れた聖は、そう言った。

「セイ……じゃない、穢か」

「そつだよ」

にこりと怪しげに笑い、穢はくいつと灸のあごを持ち上げる。

「そこまでだ。それ以上は許さん」

そして二度目の口付けを穢がしようとした時、灸は穢の口を押さえた。

「借りはこれで返せたか？」

「ううん、まだまだ」

「そうか、なら……」

これで本当に終いだ。

そう言って多少顔を赤くしながら、今度は灸が穢に口を付けた。

「私はもう寝る」

そして照れ隠しのようにそう呟きながら、部屋に引っ込んでいった。

08（後書き）

これにて第一章「黒狐」はお終いとなります。

ですがまだ続きますので、よろしくお願いします。更新速度ももう少し早く出来るように頑張ってみます。

希望があれば、第一章終了時点の人物紹介を書いてみたいと思います。

09（前書き）

第二部です

その日はやけに鴉カラスが多かった。

鴉共はがあがあとやかましく鳴き叫びながら夕暮れに差し掛かった妖怪町の上をぐるぐる旋回している。

灸は、その声によって叩き起こされた。

「……うるさい」

開口一番そう愚痴りながら小さくあくびをし、それでも布団が恋しくなってくる秋の入口、自分の精神力を振り絞って布団から出ることに成功した。

「……寒い」

寝起きで機嫌が悪く半眼になっている灸のその目は、迫力をいつもの二割増しにしている。

そして灸は、寝像悪く床に転がっている聖を勢い良く蹴飛ばしてから着替えを始めた。完璧なる八つ当たりである。

「くそっ……。こんな時間から開いてるのか？ 一体いつ来たら閉まっているんだっ！ 周りを見る周りを、店と言つていい店見渡す限り全部閉まつてるだろう？ 客なんか来ないんだ周りを見習っておとなしく閉めておけ！」

「そんなに閉めている所が見たいなら一日中見張っていたらどうだ？ 現に客なら来ただろう。ところで灸。蛙、買うのかい？ 冷やかしなら帰ってくんな。こっちも忙しいんだ」

店の主のいない屋台に向かって叫ぶ灸。だが屋台の中からは声が聞こえてくる。

寝起きから続く灸のイライラもピークに達した原因は、こんな夜早くだと言つのに相変わらず店を開けている要の蛙串焼きの屋台にあった。

「忙しくなんか無いだろ…… ああわかったわかった買うよ。六銅で適当に聖と私の二人分見繕みつくろってくれ」

「ん、まいどあり」

せめてもの腹いせに、と灸はがま口から銅貨を六枚取り出すと力の限り投げた。が、やはりその銅貨は屋台の中の空中で何かに飲み込まれたかのように消えてしまう。

「はいこれ。二人で仲良く食べなよ」

何か微かな気配がしたかと思ったたら、いつの間にか茶色い紙袋が灸の目の前に差し出されていた。灸はそれをむんずと掴むと後ろを向き、言った。

「ありがとさん。今日は鴉が多いから店の前の串焼き、取られないようにしろよ」

「ご忠告どうも。そんな優しい灸に私からの贈り物だ」

要の声が灸の元に届くと同時に、灸の首には何か暖かいものが巻かれていた。

「マフラー。これから寒くなるし、灸はそんな女らしいものを持っていなかったと思って。大事にしろよ」

マフラー、か。首に巻くものはそう言えば持っていなかったな。

灸は首だけ後ろに向け、微かに笑った。

「ああ。大事にするよ」

「……と、言うわけでだな」

帰宅早々聖に詰め寄られてマフラーの説明をすることになったいる灸。手に持っている串焼きが段々熱を失っていくのが分かる。

「えーキュウだけずるいつ。僕も要さんに言っ作ってきてもらうーっ！」

「いやセイ、別にこれは手作りじゃ決まったわけではないぞ」

「だってそうじゃないなら何でマフラーの模様にキュウの漢字が編みこんであるのさ！」

「ん？……あ」

そう言えば見ていなかったが、確かにマフラーの真ん中に可愛い
しい字体で「灸」と編みこんである。ご丁寧にもその漢字の周りには
炎のシルエットも。これでは手作りではないと言いつくが出来ない。
町の編み物屋にもこのような柄のものは無かったはずだし……。

「じゃっ……じゃあ、僕もキュウに何か贈り物するーっ!!」

「そうか、頑張れ。とりあえず串焼きが冷めるから食べてしまおう」
「僕牛蛙四本！」

そう言った瞬間考えが食べ物にシフトする聖を見て、灸は聖のこ
とが少し心配になった。

結局のところ要は灸と聖の食べる分をしつかり把握していたらしく、聖が自分の食べる分を取っても灸の分はまだ袋の中に十分残されていた。

「……悔しい程旨い」

もぐもぐと微妙な顔で口を動かしている灸を傍目に、その首にかかっているマフラーを恨みを込めるかのように凝視している聖の顔がやけに怖い。

「僕……僕、要さんに編み物教えてきてもらおう！」

「精々三日以内で諦めないようにな」

「そんなことしないもんっ！！」

すくつと立ち上がった聖は、いーっ、と綺麗な白い歯を灸に見せ付けてから勢い良く扉を開けて外へ飛び出して行く。

「まるで子供だな。穢とは比べ物にもならない」

その後ろ姿を開いたままの扉から眺めながら、灸は独り言ひとりごとちた。

「たまには単独行動も悪くは無いだろっ」

と、いう理論で灸は適当に町中をぶらぶらすることにした。何にせ灸の後ろにはいつも聖が付いているのだ。プライベートも個人情プライベート報シも何もあつたものではない。

それならば聖がいらない今日ぐらいは。

そう思いながら灸は玄関を出た。扉は閉めるが、鍵は掛けない。そんなもの端はなから付いてなどいない。そもそも家とは即ち寢床。寢床に鍵を掛けるぐらいなら襲いに来た奴を返り討ちにしてくれる。妖怪町の妖怪たちは皆そう考えている。

「あっ！……久し振りだな、灸じゃねえか」

つらつらと思案に耽ふけりながら通りを歩いていた灸の耳に、久方ぶ

りに聞く声が飛び込んでくる。

「ん……黒金魚か」

それは黒い金魚の化身、掬である。いかにも眠そうにあくびなど噛み殺しながら灸の方へと歩いてきた。

「そろそろ普通に掬って呼んでくれねえかなあ？」

「じゃあ掬、そういうええ結はどうした」

「そう簡単に変えられてもなあ……結なら何か用事があるとかで夜早くから出かけちゃった」

「そうか。……で、お前は一体どう呼んで欲しいんだ」

「どうとでも」

軽く冗談を言い合いながらそのまま通りをすたすたと歩いていく二人は、傍目からはいいコンビに見えた。

「ところで掬」

「ああ、結局そっちにしたのか」

「この頃鴉がやけに多くないか？」

自分の台詞を無視して続けられた灸の話に多少むっとしながら、それでも掬は空を見上げる。

そこにはガアガア、ギアアギアアと玉の群れになった鴉が何十羽も舞っていた。

「確かに多いなあ。誰か何かしたのか？」

「さあな。ただの鴉の気まぐれかも知れんし、お前の言うとおり誰かが何かをしているのやも知れぬ」

「夜迷鳥の所に行ってみるかあ？」

ふ、とそろそろ白くなりそうな吐息を零しながら両者は対峙する。
「酔いどれ掬にしては良い案が出たな」

「あん？別に俺はいつも酔っちゃあいねえよ。それに今は結の奴から禁酒令が出てよう……あー酒が飲みてえ」

言いながらその無造作な髪の毛をわしゃわしゃと掻き回す掬に、ため息を吐きつつ目を眇^{すか}めて灸は言った。

「道理で掬がこんな所をうろろしていたわけだ。お前、誰かに酒を無理やり飲ませてもらおうとでも考えていたな？」

「うぐ、何でその事を……！」

「態度を見ていたら解る。大方無理やり誘われたから断れなかったとか結には言い訳するつもりだろう」

「そこまで……。ああ降参降参。やっぱ灸には敵^{かな}わねえかー。さすが頭のいい奴は違う」

「おだてても酒は出ないぞ」

「分かってるって」

「禁酒ならいくらでも付き合うがな」

「ああはいはい。……ってえ何で俺の周りにはこんな奴ばかり集まるんだよ」

「何か言ったか？」

「いいや。それよりも夜迷鳥の所に行くんだろう？早く行こう、なっ？」

わざとらしく言い繕^{つくろ}う掬にもう一度ため息を吐きながら、灸は夜迷鳥の住んでいる森へと足を進めた。

11（前書き）

灸と穢がやばいことなつて来たんでR15つけます

「特に問題はありません」

森の中にちんまりと存在する小屋の扉を灸が叩いた所の反応がこれだ。

「……そうか」

もう夜迷鳥の能力については何も言うまい。恐らくは灸たちがここに来ること、あまつさえ質問の内容さえも予知していたのだろう。町の業務には何ら支障などありませんのでご安心下さい」

きつぱりと宣言された夜迷鳥の予知に、灸は一抹の不安とそれにまつわる一つの疑問を感じた。

「と、言うことは自分たちには何かあるかもしれないという事か？」

「さあ」

全く抑揚の無い夜迷鳥の声からより明らかに何か嫌な予感。

しかし夜迷鳥はこれ以上何も教えてくれはしないだろう、と灸は諦め、後ろの掬に「帰るぞ」と目配せする。

「へいへい」

呆れたような顔をしている掬は、しかし灸に逆らわず二人でおとなしく森からは退散することになった。

「つかーあ！何で夜迷鳥はこうも冷めてるかねえ！」

町中に入ったところでいきなり灸の隣を歩いていた掬が叫びだす。

「……性格なんだから仕方が無いだろう。少なくとも穢よりはましだ」

「んあ？穢って誰だ？」

ぼろっと漏らしてしまった自己最高機密。灸のしまったという顔に更に喰い付く掬。

「け……穢は、穢はだな……ここに来る前の知り合いだ。……そうに違いない」

目を限りなく泳がせながら返答する灸。

「うっうん？お前にはここに来る前何も無かったと聞いたがなあ？それにお前ここに来たのは生まれて間もない赤ん坊の頃だろう？」

「いや、赤ん坊じゃない。既に一年は経っていた」

「十分赤ん坊だろうよ！で？その穢つてのは誰なんだって聞いて……」

「俺の名前呼んだ？」

元凶登場。灸が反射的にその声がした自分の背後に向けて回し蹴りを放つが、当たらない。逆に灸は後ろから優しく抱きしめられ、犬の耳とは別の人間の耳の方を優しく甘噛みされる。

「ひゃうっ……や、やめろっ！刺すぞ！」

顔を真つ赤にして灸は拳を振り回しながら背後の忌々しい知り合いに当てようとしているがやはり当たらない。

「恐いなあ。やめてよキュウ」

「だからキュウと呼ぶな！……あうあうう」

穢が灸の耳を軽く噛む度に灸の顔の紅潮度じつぱくどが増す。

それを見て掬は目を丸くした。

「ええ？聖？……え、何お前ら。関係逆じゃなかった……」

「ええいうるさい黙れ掬！こいつが穢だ！決してセイなどでは無い！」

「ん？キュウ、いつの間にそいつを名前なんかで呼ぶようになったのさ。君は俺のものだよな。そのイケナイお口はどうしたら俺の名前だけを呼んでくれるようになるのかな？」

そう言いながら穢は灸の口を自分の口で塞ぐ。つまりキス。しかもまた舌まで入ってくる。

いよいよ追い詰められた灸は自分の口内に侵入してきた舌を思いつきり噛み、その上で全力を込めて火球を放った。

「放れる変態！！」

はあはあと息も荒く火球の飛んでいった先を見て、それでもやりしまったと言う顔をする灸。いくら自分の危機だと言っても、火の玉を全力で放ったのだ。聖の身体に傷がついてしまったかも知れない。

「あーもー本当にキュウは強引だなあ」

だがしかし、そんな心配は無用だった。ちゃっかりと穢は自分のスキルである闇で火の玉を侵食し、消してしまったのだ。

「……あのさあ灸、そろそろ俺頭と腹が痛くなってきたんだけど」
掬が灸に小声でそう言う。

「済まない掬。今度説明するから今は逃げてくれないか」

「ああおれも死にたきゃあ無いからな」

必要最低限の会話を交わすと、掬はすたこらと逃げ出した。

「あれ、あいつ逃げちゃったんだ」

「いいからセイと代われ穢」

「えー」

「えーじゃない」

「はい」

むくれて穢はそう言うつと、小さな焦土と化した通りの真ん中でへたりと座り込んだ。

「……………」

そして後には顔を真っ赤にさせた聖と灸だけが残された。

「キュウ……ごめんね？」

「……」

「まさかあんなことになるなんて……」

「……」

「……思ってたなかった、って、反応してよキュウ！」

「……穢に言っておけ。次したらセイごと殺す」

どこまでも冷淡な口調の灸に、涙目の聖が必死に言い繕つくろっている。
現在二人は家の奥の小部屋で向かい合っている。

「さて本題だがセイ」

「ひゃううっ！」

今もう聖は極限状態にある。理由は、灸の清々しいまでの笑顔。
この顔をしている灸が一番危ないと言うことを聖は良く知っていた。
「何か周りで変わったことはないか？ 鴉が増えたとか鴉が増えたとか鴉が増えたとか」

「どれだけ鴉増やしたいのさ……大丈夫、特に何も無いよ」

笑顔で壊れたように鴉が増えたと繰り返している灸に、思わずツ
ツコミを入れてしまう聖。

「……特に？」

「あ、いやなんでも無い何も無いから何かあったわけじゃないから
徐に武器を取り出さないで！」

「あんの夜迷鳥、セイに何かしたら容赦しない……！」

「僕を守るってことは穢も一緒に守るって事だよ？……キュウはそれ
でもいいの？」

ぎりぎりと刀を構えて危なげに鞘ひざごと振り回す灸におずおずと聖
はそう切り出した。

「良い訳ないだろう?!でもセイは守る!この命にかけても!」

「それ普通僕の台詞だよな?……ほんとに僕は大丈夫だから!」

「……………」

聖の言葉を咀嚼そしゃくして嚙下えんかして、ようやく落ち着く灸。安心して腰を落着けた灸のその横顔を見ながら聖は正座を崩し胡坐あぐらをかき、そして何かを思い出したように灸に声をかけた。

「ねえキュウ」

「何だ?」

「キュウは、何色が好き?」

「色……か。赤も好きだが、敢あえて言うなら……あれだな、青緑。吸い込まれるような青緑が好きだ」

「ふうん、そうなんだ」

「何でそんなことを聞いたんだ?」

「うつん、何でもない」

屈託くつたくなく笑う聖を、灸はそれ以上追求することが出来なかった。どちらともなく笑い出す灸と聖。灸の首にはまだあのマフラーが揺れていた。

ガア、ガア……。

夜も更ふけ、そろそろ朝日が浮かぶ準備をし始める頃。

一羽の鴉が妖怪町一高い木の天辺てっぺんで鳴いていた。

神木として妖怪たちに崇あがめられているその木は、妖怪たちが崇めるだけあって葉がすべて落ちながら、それでも生きている大樹である。見た目は大きな枯れ木と何ら変わらない。

はずだった。そうでないとおかしいのだ。

なのに、今その鴉が鳴いている木は何故か葉があつた。しかも、一枚や二枚ではない。その木はこんもりと針葉樹のような形になっている。

そしてよく見ると、その葉は本物の葉ではなかった。

何百羽、何千羽、果ては何万羽もの鴉たちによって形成される、
大きな鴉の群れだったのだ。

その大樹は神木のまま「鴉の木」となり、鴉たちの不穏な鳴き声
は妖怪町の平和を揺るがし始めた。

12（後書き）

お知らせ：私鈴鳴月は学生でありまして……はい。中間テストが迫っております。

更新が遅れることが危惧されますが生温かく見守ってください。

13 (前書き)

遅くなりすみません

「これは……見事だな」

どつしりと妖怪町にそびえ立つ神木を見上げながら、聖と並んで二人灸は呟いた。

もう真夜中を少し過ぎたような時刻なのでさすがに鳴き声は聞こえないが、それでも枯れ木の様相だった神木が針葉樹の形に盛り上がっているのだ。驚かないわけが無い。

「ねえキュウ、夜迷鳥は何て言ってたの？」

「町の業務には何ら支障無いと言っていた。が、どう見ても支障が出そうな……もしかして予言を外したのか？」

「それは無いだろうな」

灸が首を傾げながら見上げるという器用なことをしていると、不意に背後から声が聞こえた。

驚きのあまり灸は腰の刀に手を掛けながら声の主を睨み……かけて、すんでのところで留まり、刀から手を離す。

「黒狐様でしたか」

そこにいたのは黒い着流し姿の黒狐だった。

「驚かせてしまい済まなかった。が、夜迷鳥の予言は外れてはいない」

「……と言つと？」

灸の隣で聖が更に首を傾げる。

そんな聖に苦笑し、黒狐は説明を始めた。

「ここ最近鴉が増えているのは、どうやらこの神木が呼び寄せているからだそうだ」

「神木が？」

「その情報はどこから？」

前者が聖、後者が灸。やはり灸の方が少し深く理解しているらしい。

「環たまきのところに来た小さな使者からだ」

「白狐様のところに、使者？」

環とは白狐の名前である。黒狐と白狐はお互いを名前で呼び合う仲なのだ。ちなみに黒狐の名前は玉ぎよく。

「ああ。何でも名のある森の主の使いだそうで、居丈高むげだが無碍むげに扱えん」

「……」

「どうした？急に黙って」

「すみません黒狐様。そいつに少し心当たりがありまして」

言葉の通り、灸にはその使者の正体に少しと言うのには心当たりがありすぎていた。

「……」

隣で聖が少し震える。

嫌な予感がした。

「ほら、あいつだ」

心当たりがあるなら有難い、と黒狐は断るに断れない灸を引きずって使者のいる部屋の前まで連れて来ていた。

聖は家に逃げ帰っている。

今頃隠れるところは無いかと家中を探し回っているところだろう、と灸は思った。

「……………はあ」

灸がついたため息を吐いた、それだけの音に使者は敏感に反応して一瞬で灸との距離を詰める。

「やつちゃん？」

キラキラと輝く緑で軽く透けている幼女の瞳から、灸は目を逸そらせなくなる。

「……はい、灸です」

「やつぱりやつちゃんだ！久し振りだね元気にしてた？まだあたしの作ったこの服着てくれてるんだありがとっっていうかひーくんはどこにいるのいつもやつちゃんの横にいたじゃないどこに隠したのさあ出しなさいやつちゃんとひーくんが揃ってるところ見ないとあたし我慢できないんだからほらさっさと出しなさいそうじゃないとまたあたしやつちゃんに憑いちやうかもしれないのあの痛みもう味わいたくないでしょう出して出すのよ出しなさいってば――」

「――！」
幼女は灸の胸倉をつかんでぶんぶん振りながら聖を出せと迫ってくる。

「い……家です、セイは家にいます」

気持ち悪くなりながら何とか搾り出したその言葉に反応すると、幼女は灸を置いて灸の家の方向へものすごい勢いで走り出した。

げへごほと咳き込む灸にハンカチを渡す黒狐。

「……お前も大変だな」

「ええ……」

さすがの灸もここで否定は出来なかった。

13（後書き）

テスト中の現実逃避の寄せ集めです

次回も遅くなると思いますがよろしくお願いします

「……すまないが、名を覚えてくれないか。聞いていなかったような気がするな」

白狐と黒狐の家の中。応接間にある木で出来たテーブルを挟んで同じく木で出来た椅子に座り、幼女と黒狐は対峙していた。

幼女の横にはやつれたような顔の灸と聖が幼女を挟むように立ち、静かに黒狐へ助けを求めている。

「コスモよ。身分はさっきも言った通り昔大陸から渡ってきた一介の精霊で、今は那舞の森の統治者」

鈴のような声音でコスモと名乗った幼女はそう言いながら薄く笑い、鳶色の長い髪の毛を揺らす。細められた目は透けるような緑色だが、左目と右目で色が違う。左は萌葱色、右は翡翠色だ。

確かに、コスモの目に浮かんでいる表情は幼女に出せるものではない。それなりの年季を経ていると、今コスモが出しているような曖昧でつかみ所の無い表情を出せる者は少ないだろう。

「那舞の森、か」

「そう。そしてやつちゃんとひーくんのこの服を作ったのも、あたし」

コスモはそう言いながら、傍らの灸の神主服の裾を軽く引っ張る。灸は少しよろめいた。

「今回妖怪町を訪れた目的は？」

「無粋なことを聞くのね。目的が無かったらこの町には立ち寄ってもいけないの？」

「……………」

黙りこくってしまった黒狐を見てけられと笑うコスモ。

「今のは冗談。ここの神木の様子を確かめに来ただけ。あと、やつ

ちゃんとひーくんの成長具合もね」

見た目に似合わぬ口調で話すコスモの言葉は、上から目線なれど耳に心地良い。黒狐はそんなコスモに嘆息し、口を開いた。

「神木と言え……今の異変について詳しく聞きたいのだが」

「あ、それ？ちよつと前にも言ったと思うけど、あれはただの自然現象みたいなもの。……神木現象とでも言えは良いのかな？」

コスモはそこで少し考え込むように言葉を切った。

「まあ、気にすることは無いよ。時期が来れば鴉は消えるでしょう。

……ただ——」

「ただ？」

灸が耳みみ聴くその言葉に反応する。

「ただ……ね。少しおかしいことが起こると思うけど、貴方達の予言者の言葉は間違っではないいわ」

「なぜ夜迷鳥の事を知っている？」

「秘密」

いたずらっ子のように口に人差し指を軽く当てるその仕草は、まるで見た目年齢相応のよう。

「教えてはくれないのか」

「ええ。貴方に話す事では無いもの」

呆れたように額に手を当てる黒狐の姿を見て、灸は目を見開いた。その仕草は黒狐の降参のポーズ。灸は黒狐が口喧嘩で誰かに負けた所を見た事が無いのだ。口が達者なあの白狐でさえも、黒狐の口車には敵わない。

「分かった、歓迎しよう。コスモ殿、この町に滞在中は灸と聖の家を使うと良い」

「ちよ……黒狐様?!」

「コスモ、で良い。泊まる所は元からそのつもりよ」

慌てふためく灸と聖を尻目に、二人はさっさと話を進めてしまう。「灸と聖だけでは緊急事態の時に不安だろう。一人護衛をつけるが、希望はあるか？」

「そうね、女の子がいわ。灸より年下の」

「そういえば灸、お前の年はいくつだったかな」

「……十七です」

「そうか。……大丈夫か？疲れているようだが」

「いえ……」

それは黒狐様のおかげです、と灸は心の中で静かに呟いた。

「^{さすが}便と申します。コスモ様、灸様、聖様、これからしばらくの間お世話になります」

コスモに半ば引きずられるように家へと向かうと、家の前には既に十二、三歳程の女の子がいた。便と名乗るその少女に、灸と聖はなぜか見覚えがある。

「失礼だが、どこかで会った事があるだろうか」

短く濃い黒の髪に下着が見えそうな丈の着物に高い下駄という出で立ちのこの少女をどこかで見たなら、これだけ衝撃の強い見た目の少女、記憶には残っているものだろうが、そこまではっきりと残っている訳でも無い。

そう言つて首を傾げる灸と聖を見て、便は軽く微笑^{ほほえ}み、口を開く。
「忘れてしまったのですか？つい先日お会いしたばかりですが……
ああそっか、あの時はこの姿だったから」

灸が瞬きした次の瞬間には少女の姿は無く……

……代わりに、そこにいたのは何万羽もの鴉だった。

14（後書き）

誤字・脱字等ご指摘下さい

「……鴉？」

呆然と灸が呟くと、その何万羽もの鴉は一斉に灸たちの方を向いた。

『はい、鴉です。私たちは何万羽でひとつの妖怪なのです』

そしてその鴉たちが口を開いているわけでもないのに、一羽一羽の羽根の擦れる音や黒い足で地面を蹴る音などがまとまってひとつの言葉を形成している。

この連携は間違い無く、ただの鴉の群れには成せない芸当。それを聞いて灸は更に訊ねる。

「ではあの神木に集まっていた鴉が、お前だと言うのか？」

『ええ』

「そのことを知っていて黒狐様はお前をコスモの護衛にしたのか？」「いいえ、灸様。決して黒狐様はこの事を知りません。それに私たちは護衛でもありません。ほら、もうすぐ本当の護衛が到着しますよ」

そしてそう言うと、何万羽の鴉はまた一瞬で元の女の子の姿に戻ってしまった。

「私はただ灸様と聖様にご挨拶をしておきたかっただけ」

「それはどういう意味——」

「お待たせしました！護衛の縁と言います！」

灸が何かを言いかけ、それでも突然飛び出してきた少女に一瞬気を取られている隙に便はいなくなっていた。

「わ……私ではない護衛、ですか？」

家の中。

とりあえず遅れて到着したその縁という護衛に、灸は訊ねていた。
「そう。何か心当たりはあるか？」

「いえ……。私と同年代なのはあと二人しかいなくて、そしてその二人は男の子なので今回の護衛にはなることが出来ない……」

「そうか、変な事を聞いたな」

「い、いえそんな！」

どうやら本当に便という女の子はあの鴉だったようだ。
だとしたら、便の目的は何だったのか。

灸は一人首をひねった。

「まあ、これからよろしく」

「あ、はい！よろしくお願いします！」

面白い程に慌てる縁を見ながら灸は軽く微笑ほほえんだ。

奥の小部屋からは聖の悲鳴とコスモの楽しそうな声が響いていた。

すっかり鴉の木と化した神木の上で、鴉の身体のままの便たちは考えていた。

『この木に呼ばれて来て良かった』

『あんな面白い人に会えたのももの』

『灸様になら、教えてもいいかも』

『——この町に潜む、秘密を』

「灸様、灸様。起きて下さい」

耳元でささやくようなその声に灸は身を起こした。そして本能的に身構える。

「……何だ縁か」

耳元でささやいていた声は、縁のものだった。窓からはまだ射るような日差しが降り注いでいる。どこからどう見ても、真昼間だ。

「こんな時間に何だ？侵入者でも来たか？」

そして大きく欠伸をしながらからかうように言う灸の耳に流し込まれる、熱湯のような言葉。

「あの……失礼ですが、この方はどなたでございましょう？この……灸様の隣で気味悪く笑っていられる聖様に瓜二つのこの方は」

「ええい穢またお前か！」

灸は自分の隣を見て、鞘付きさやの刀をそこにいた穢の首に叩き込んだ。

幸せそうに声も無く昏倒こんたうする穢。

そしてなぜかその後ろでにつこりと笑っているコスモ。

それを見て安心したような顔でまた元のようにぱたりと就寝した灸を見て、縁は思った。

「……私は、侵入者よりこの方からコスモ様をお守りしたい気分になってきました」

番外 狛犬と大精霊（前書き）

小さな話です

読まなくとも別段本編に支障はありません

番外 狛犬と大精霊

「ねえ、何してるの？」

呟いたのは幼子。犬の耳に尾を生やした、小さな狛犬こまいぬの女の子。

「糸を織ってるのよ」

対して答えるのも幼子。左右微妙に色の違う緑の目をした、小さな大精霊の女の子。

聡明そうめいそうな目をした狛犬の女の子は、身の丈には余りにも合わない着物を着ていた。

それを見て大精霊の女の子は言う。

「糸が織れたら、心の澄んだ貴方のために服を作ってあげましょう」
それを聞いて、狛犬の女の子の顔が綻はらぶ。

「じゃあ、服を作ってくれたら、わたしがいいところへ連れて行ってあげる」

その言葉に、大精霊の女の子は微笑した。

「可愛い。ありがとう」

出来た服は、狛犬の女の子にぴったりの神主の服。

「綺麗。ありがとう」

そして狛犬の女の子が連れて来た場所は、大精霊の女の子がとも住みやすそうな綺麗な場所。

お互いに名も知れぬ二人の少女は、されど友達であった。

番外 小さきあの日（前書き）

久し振りに一人称で

聖視点です

妖怪町に来る前のふたり

妖怪は成長が早いのでふたりは人間の3歳ぐらいだと思っていた
ければ

今回も読み飛ばしていただいて構いません

番外 小さきあの日

寒い、寒いとくり返しながら落ちてきているような雪を見ていた。大きな着物のそでから出る小さなかじかむ手に息を吹きかけながら、僕は社の前の狛犬像の上に座っている。

大は小をかねるとは言うけど、こんな冬の日の着物はやっぱり大でも小でもなくぴったりがいい、と僕は思った。

僕たちの仕えるかみさまがいなくなってしまったのはもうずいぶん前のことになる。

僕たちが生まれてすぐのこと。夏の暑い日、あの日も僕は着物がぴったりだと思っていたのだった。

かみさまは生まれた僕たちを見て、なにも言うことなくふわりと消えた。

やいとは「私たちのことが気に入らなかったんだ」と言っていたけど、僕はそう思わない。

きつとかみさまは僕たちが生まれるまでずっと待っていてくれたんだ。

僕たちのような狛犬は前に仕えていた狛犬が死んでしまったら新しく生まれることになっている。

でもぼろぼろな社を見るかぎり、かみさまがどれだけ人々からたよられなくなっただけから年月がたっているかがよく分かる。

かみさまは人々にたよられなくなったら消えてしまう。

それは僕たちのかみさまでもれいがいではなくて。

かみさまはやさしかったから、自分のいのちをけずってでも僕た

ちの生まれるまで死ねないと思ったんだ、と思う。

そして生まれた僕たちに、大きくなっても着物を買う必ようがないように、と大きな着物をおくってくれた。

僕はそうだといいなと思っている。

でもやいとはちがうみたいで、大きな着物をひきずって僕たちのかみさまを今でもさがしている。

いくら僕がかみさまは死んだのと言っても、聞かない。もしかするかもしれないと言い、まい日のようにさがしに行く。

がんばって、がんばって、それでもかみさまは見つからない。

雪がつめたいのは、がんばってはたらいて熱くなった世界をひやすためらしい。

やいとや僕はがんばっても熱くならないから、雪はいらない。

でも、だったらなんで雪は僕たちの上からふるんだろう。

そう思っていたら、やいとがふらふらしながら帰ってきた。

やいとのようなすがおかしいと思ったら、かぜをひいていたようだ。まい日まい日がんばっていたやいととは熱かった。

僕はどうしたらいいのか分からなかったから、ひやすことにした。がんばった世界はひやせばいいんだったら、がんばったやいともひやせばいいと思った。

雪を手のひらですくって、やいとのおでこにのせる。

なかなかやいとと熱くなった体はひえてくれない。

僕の手がかわりにつめたくなっていく。

その夜、人が社にきた。

おまいりをしにきたのかと思ったけどちがうみたいで、「ひみつきち」がどうかさわいでいた。

そして社の中にくつでそのまま入ろうとしたから、中にはまだかぜをひいているやいとがいると思って僕はそれを止めようとした。そしたらなん人かによってたかってかられたりなぐられたりした。

人間に狛犬だとばれたらいけないので耳やしっぱはかくしていたが、そのじゅつもとけそうになるほどひどいいたみが体中をかけた。ぐった。

それでも必死にたえていると、社のおくの方からやいとが走ってきた。

そしてやいととは僕が止める間もないほどはやく人間たちにあたまからぶつかっていった。

僕はやいとを守ろうとしたけど、けっきよく守れなかった。

まだ赤いきず口を見ながら、まだ熱いやいとを見ながら、思った。

これからはずっとやいとを守るんだって。

やいとがいくらいやだって言っても、やいとにもうきずはつけないんだって。

番外 小さきあの日（後書き）

次は本編に移りたいと思います

「ほら」

そう言ってコスモは神木に抱きつく。

灸と聖と縁は、その様子を静かに眺めていた。

「この木、呼んでる」

そうコスモが言った途端、神木が淡く輝きだす。

「……」

あんぐりと口をあけて驚きを表す三人。

それも無理はない。今まで三人は神木の神木たる所以ゆえんを全く知らずに過ごしてきたのだ。散々ただの木として扱っておきながら今更神木らしいところを見せられても、どう反応していいかわからなかったのだろう。

「うん……うん、わかった」

神木に抱きつき、額を樹皮にくっつけながらコスモはそう呟く。

まるで神木と会話をしているかのようなその姿は、やはり一介の大精霊。

普段は全くといっていいほど精霊らしいところがないコスモだが、こんなところだけはしっかりしているらしい。

しばらくそんな状態が続いただろうか。

おもむろに、コスモが顔を上げた。そして灸たちのいる方向を向く。

「やつちゃん、この木があなたについてきてほしいって言うてる」

「……は？」

「だから、この木がついてきてほしいって」

「……どこにだ？」

少し遅れながらもそう返してしまう灸は、恐らくまだ驚きから完

全に抜け切っていないのだろう。

普段ならそんなことはないと言っきになって言い返しているはずだ。

「『秘密』の場所に。とりあえずこつちに来て」

灸はコスモの言葉どおり神木の傍^{そば}まで歩いていった。

「この木に触れてくれる？」

「……ああ」

我ながらこんなことに付き合うなど酔狂^{すいきやう}だな、と自嘲^{じちやう}しながら、灸は神木に手を触れた。

瞬間。

灸はまるで神木の中に吸い込まれるような感覚と、神木から聞こえてくる葉をこするような音に包まれた。

意識が宙に浮いているような感じ。思わず灸が目を閉じると、灸の周りを緑色の風が覆う。

「……っ！」

そして次に灸が目を開けると、そこは全く灸の知らない場所だった。

「ここは……」

思わず灸は呟く。

そこは、植物で出来た大きな空間のようなところだった。

地面からも、壁や天井と思しきところからも植物が生い茂^{おほ}っている。それは季節や地域に関係なく、恐らく全ての植物が。

だから、そこはとても大きな空間だった。

「気に入った？」

見とれていた灸の後ろから、不思議な声が聞こえた。

灸が振り返るが、そこには誰もいない。

「誰だ？」

「あ、ごめん。姿を現してはいなかったね」

その言葉とともに、振り返った灸の前に現れる人。

それは、コスモを更に大人にしたような姿の男の精霊だった。

「これでいいかな？この姿をするのは何分久しぶりなもので」

目の前に現れたその精霊は、灸に向けて軽く笑う。

「……誰だ？」

灸はいきなり現れた精霊に向かってもう一度問うた。

「ああ、名乗っていなかったか。僕は妖怪町の神木。名前は……特
に無いや。神木とでも呼んでおいて」

「……神木……って、あの？」

「うん、その神木。そしてここは妖怪町の中にある『秘密』の場所」

「ふーん、秘密……か。………ん？」

実にさらっと流されたその事実、灸は反応しそこなう。

「ここは多分白狐とか黒狐とかも知らないんじゃないかなあ。だっ
て僕が招待しないと入れないからね」

「んなつ……！そんな所なのか？！」

更に流される妖怪町最高機密。

今度は流されてしまうことなく、灸は反応することが出来た。

「そうだよー。で、君をここに連れてきたわけは便に言わせたでし
よう？………っていつかあの馬鹿また話の内容をぼかしたとかそんな
ことある？」

「……確かに何を言っているのかいまいち分からなかったが……」

「ふうん……まあいいや。じゃあ説明するね。端的に言つと、灸様」

「様付けなのか？………で、何だ？」

「僕はあなたに忠誠を誓い、仕えようと思います」

「……………は？」

恐らくとても間拔けた顔。灸は自分では見ることの適わない顔を、そう自己分析した。

誰か助けてくださいと辺りを見回すも、灸と神木以外誰もいない。

「……………何で？」

「灸様は僕なんか及びもつかないほどたくさんの方を持ってるから」

「……………いや、私に仕えるぐらいなら白狐様や黒狐様に仕えた方が」

そんなそんな恐れ多い、と困惑した顔のまま両手をぶんぶん顔の前で振る灸。

「じゃあ強引に契約を」

「……………え、今何て……………?!」

小さく呟かれた神木の言葉が聞こえなかったので聞き返そうと灸が耳を寄せると、神木はいきなり――

いきなり――灸の首筋に噛み付いてきた。

「うっぎゃあああああああああ??!!」

痛いのと恥ずかしいのと驚きと困惑と。あとその他もろもろが入り混じった灸の悲鳴と共に灸の体からあふれ出す炎の塊。

その炎で辺りの植物はあらかた塵ちりに還ってしまっただが、神木はそんなものなど気にしない。

灸が自分の体に何かを流し込まれたと感じる頃には、神木は灸の体から既に二メートルほど距離をとっていた。

「なっ……………何をする!!」

「正確には、『何をした』ですよ。灸様」

からかうような神木の言葉にまた灸の顔が朱に染まる。

ああこんなことが前にもあったな、と脳裏を過るかすかな記憶。
しかしその記憶を呼び戻す前に、はたと灸は気づいた。

「神木、お前……その目はどうした？」

神木の緑色をした目は、両方とも朱になつていた。赤でもない、
橙でもない、そんな色。

……灸の炎の色。

「ああこれですか？ 契約したから。灸様と」

また気づけば丁寧な口調になっている神木は、精霊は契約をする
とその契約主の色に体のどこかが染まるのだ、と灸に教えた。

それは髪しかり、神木のように目しかり。

「これで灸様も僕が仕えるのを拒めないでしょう？」

にやりと確信犯的に笑う神木の顔は似ていないはずなのに誰かに
似ていて。

灸は、仕方が無い、と運命を享受した。

「で。本当の目的は何だ？」

灸は静かに神木に訊ねた。

「こんな用でここまで呼びつけたわけではないだろう？」

「やっぱり気づいてたか。さすが灸様」

また、誰かを髣髴とさせる薄笑い。

「灸様には、ちよつとまた来てほしいところがあるんだ」

そう言つと、神木は灸に手を差し出した。

「……ん？」

訝しげな顔をしながら灸がその手を取ると、それで良しという風
にうなづく神木。

そして神木は灸と繋いでいる手を天に向かって高く上げ、叫んだ。

「〔転移〕！」

何かに引つ張られるような感覚。

混乱した頭でその感覚に軽くデジャヴを感じながら、灸は神木と
共にその空間から転移した。

一方、残された聖とコスモと縁。

「……キユウ、また何かに巻き込まれたのかなあ」

「何かって？」

「いや、キユウはちーっちゃい頃から何かにつけて色んな出来事に巻き込まれやすいっていう不思議な性質を持つてるんだ」

「灸様のことは、誰に聞いても皆灸様が何かしらに関わっているって言うんです」

「……やっちゃんも大変なのね」

「その大変の原因の一つにコスモが関わってるんだけどね」

「……そうなんですか？まあ……それっぽいですけど」

「ひーくん、縁ちゃん、何か言った？」

「「いえ、何でもありません」」

「ところでひーくん、今度やっちゃんには何をプレゼントするつもりなの？」

「なっ！……んのことかなーあ……」

「隠しても無駄よ。昨日奥の小部屋に青緑の毛糸玉があつたわ」

「え？聖様、灸様に何か贈り物をされるのですか？」

「ふふん、編み物は得意なの。ひーくん、良ければあなたに手袋の編み方を教えてあげても良くてよ？」

「い……いいもん！要さんに教えてもらってるもん！」

「「へーえ」」

「……はっ！ち……違うからね？灸の好きな色で灸に手袋を編んであげようとか考えてないからねっ？！」

「「ふうーん」」

「違うもん！違うったら違うの！」

聖の服のあちこちに青緑色の毛糸が散っているのを知らぬは本人のみ。

白々しく否定する聖を、優しい目で見つめる二人だった。

17（後書き）

誤字・脱字等ご指摘下さい

18 (前書き)

遅くなりすみません

「はい、お帰りなさい。ご主人様に灸様」

灸が人生（？）初転移の後に目を開けると、にこにこと笑った便がそこにいた。

「お帰りは良いが便。お前また肝心なところ説明してなかったよね？」

「……………」

転移早々険悪なムードの二人。

「それより、ここはどこだ？」

灸が訊ねた。

それもそのはず。灸が飛ばされたところは鬱蒼うつそうと茂る森の中。立っている場所すら地面ではなくかなりな高さのしっかりとした草の上と言うのだから、それはそれはどこなのか判別が付かないのも無理はない。

「秘密の場所・バージョン2……かな？知って欲しいんですね。灸様には」

「そうそう」

互いに顔を見合わせてにやりと笑う神木と便。

「知るって……何をだ？」

すると、便がいきなり一羽の大きな鴉の姿になって言った。

『妖怪町の、秘密を』

「……え、ちよっ……！わあっ、何をする！」

それだけを言うと便は灸を自分の背中に乗せると、飛んだ。
「いつてらっしゃーい」

地面(?)では神木が満面の笑みで手を振っている。

『正確には何をした、ですよ。灸様』

「待てっ！その台詞を聞く時はこれから悪いことが起こる時だ！だから降ろせっ！」

「ごうごうと耳元を走り抜けていく風に負けないように叫びながら、灸は便の背をぽかぽかと叩いた。

「それが降ろせないんですよねえ」

「何故だつ！」

『ご主人様と契約したからには、この地に潜ひそむ秘密を知って頂かないといけないんです』

「好きで契約したわけではない！」

『知っています。……ご主人様は嫌がる人に無理やり契約するのが好きですから』

「主従揃って変態だな！」

『お褒めの言葉と頂きます』

「最低だっ！」

「さて……見えて来ました」

「え、どこ？……いや、その前に秘密とは何だ！」

『見ればすぐに解ります。ほら、しっかり掴まっています下さい』

「あ、ああ」

便に怒りと話を流される灸。

そう言ったすぐ後、便が急停止しそして急滑降。

「ちよつと待つ……きやあああああつ！」

普段の灸からは想像も付かない可愛い悲鳴が飛び出した。

「……着きました……けど。降りてください。……灸様？」

「もうやだ……」

便の背中には、耳も尻尾もしゅんとうなだれて泣きそうな顔でしがみついている灸の姿があった。

『しょうがないなあ』

よいしょっ、と一声。

「降りないつもりなら、このままおんぶして行っちゃいますよ?」
そこには人間の姿で灸をおぶっている便が。

「降りる。今すぐ」

「えー」

「えーじゃない」

灸は便の背中からするりと抜けると、何事もなかったかのように便の横を歩き始めた。

「素直な灸様、可愛かったのに」

「うるさい。で、目的の場所ってのはどこだ?」

「そこ」

便が自分たちの前を指差す。

「……橋?」

「そう、橋」

真っ黒。漆のようにつややかな黒い橋。

それが森を抜けたその先のとてつもなく大きな川に架けられていた。

大きすぎて、長すぎて、向こう岸に何があるのかすらもわからない川の橋。

そんな橋なのに恐らくは木造。そして、アーチ型になっていて川に支柱が立っていない。

「ここは、鴉橋って言ってます」

便が言った。

18（後書き）

更新速度が遅くなります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2076w/>

妖怪町騒動

2011年11月19日02時46分発行